校長の生徒・先生応援日記 Vol.39

学びの匂い

言い訳を寄せ付けない強い意志

新しい年を迎えて直ぐのこと、私は、友人を訪ねるために品川方面へ向かいました。自宅最寄駅から西武新宿線に乗ると、いつものように車掌の声が聞こえます。「ドアが閉まります、お近くのドアから押さずにお乗りください。」その後、高田馬場駅で山手線に乗り換えても「ドアを閉めさせていただきます。ドアに挟まれないようにお気を付けください。」日常的に電車を利用する私たちにとって駅や車内でのアナウンスは、生活の一部として溶け込んでいる安心感があります。

電車はさらに都市部へ向かうと、初詣に出かける人たちで混雑し、品川駅を降りた時は、いつもと変わらない通勤ラッシュの様でした。私は人混みを縫うように改札を通り、電車を待つ列の最後尾へ並んだ数分後、この路線を印象付けている赤色の電車がホームに入ってきました。

ドアが開き、前から順番に乗り始めると、なぜか同時に発車のベルも駅構内に鳴り響きます。まだ乗車していない私は「え？」と、乗り遅れてしまう焦りからでしょうか、無意識にも前の人の背中に圧を掛けてしまいます。やっとの思いで車内まで辿り着き、足を一歩踏み入れた瞬間、「ドアを閉めます。」お客さんの安全を優先させた「ドアが閉まります、気を付けてください。」の言葉ではなく「私の責任でドアを閉めますから。もたもたしているとドアに挟まれますよ。」と言わんばかりのこれまでとは違う感覚を覚えたのです。お客様ファーストの気遣いで乗車することに慣れている私は、この言い切った言葉に、ダイヤ通りに運行しなければならないプロとしての使命感を感じたのです。

このことがきっかけとなり、私は、相手への気遣いを優先するあまり、自分で責任を負わないような表現について思考を巡らせました。例えば、千円丁度の買物をした時、店員さんは、「千円お預かりいたします。」と言い、レジにお金を収めます。でも、よく考えてみてください。預かるのであれば、必ず返してくれてもいいはずです。辞書にも預かるとは「一時的に受け取る行為」とあります。お釣りが発生しないのであれば、「千円丁度、いただきました。」このような対応が正しい接客です。また、私の知人には、会話の最後に決まって「分かんないけど」を付けます。「四丁目のラーメン屋って美味しいらしいよ、分かんないけど。」「昨日さぁ、友達が君と一度でもいいから話してみたいと言ってたよ、分かんないけど。」確実なことでも、敢えて内容をぼかすことは、自分の責任ではないことを担保に主張しているように聞こえてしまいます。日本人の優しさがかえって禍しているようにも感じるのです。

令和８年１月、３学期の始業式でのこと、私は全校生徒に対し、これら身の回りに起きたエピソードを交えて、一年間を強い意志で臨むことの大切さを伝えました。「一年の計は元旦にあり」とも言われるように志望大学合格、大会優勝、コンクール金賞、遅刻０など、実現させたい目標を掲げるのには絶好の機会です。しかし、強い意思に基づく計画でも、人やモノ、タイミングを言い訳に心のブレーキが作動すると、結果的に一年間を通して「頑張ります。」を言い続けているのではないかと生徒へ問いかけたのです。

日本人のきめ細かな心遣いやおもてなしを表現する言葉には、多くの曖昧さを含んでいます。「ドアを閉めるぞ！怪我しても知らんぞ！もたもたしないで早く乗って！私はダイヤを乱しません！」このような自分の仕事を全うするために言い訳を寄せ付けない強い意思を表明することができれば、これまでとは違う学校生活が学びの匂いとなって「頑張りました！」と言い切れる新しい自分との出会が待っているかもしれません。

令和８年１月